

## 地域との交流から 札幌国際センター・帯広国際センター

### シティインフォメーションデスク、活躍

10月19日(木)の夕刻、JICA札幌ロビーに開設されたシティインフォメーションデスクは、2日前に到着しフリーフィングを終えた東欧やモンゴルの研修員で賑わっていた。

このインフォメーションデスクは、5年前にスタートしたJICA札幌ボランティア事業のひとつで、登録ボランティアが滞在している研修員に対して、毎週土曜日の午前中とそれぞれの研修コースが入館した週の木曜日の夕方、買い物、外出時の交通機関、観光やイベントの情報などについての質問に答えている。

この日は東欧やモンゴルからの研修員が到着したばかりとあって、英語担当の吉越さんとロシア語担当の白倉さん、樋口さんが和やかに応対していた。

スタート当初から登録している白倉さんは、「自分の町、住んでいる所を知ってもらいたいという気持ちでしています」と毎回熱心に相談にのっている。札幌に移ってきてまだ日が浅い樋口さんは「仕事でずっとロシア語を使ってきたので少しでも役立つなら嬉しい」とこの日も時間いっぱい研修員たちの質問に答えていた。



午後5時半、当日のボランティアのお三人がスタンバイ。さっそくアルメニアの研修員さんが…



午後6時過ぎ、アゼルバイジャン、アルメニア、モンゴルなどの研修員たちが揃って顔を見せる。回答に忙しい白倉さん、樋口さん、吉越さん(手前から奥へ)

### 日本の文化に触れてもらう

帯広国際センターでは、JICA研修員に日本の文化に触れてもらうため余暇の福利厚生事業として茶道をはじめ華道、書道、空手などの教室を月1回程度、また着物を着た写真の撮影会を研修コースごとに開催している。

茶道教室はセンターに隣接する「森の交流館・十勝」の茶室「青風庵」で行うが、研修員には抹茶の苦さよりも正座することの方がつらいようだ。華道教室の作品はロビーやラウンジに飾られるが、先生の指導のたまものとはいえ、初心者作品とは思えない出来映えも見られる。

また、空手も運動不足ぎみの研修員には人気があり、帰国の際に空手の道着を買っていき求めている人も多くいるほどである。着物撮影会ではいろいろなポーズを取ってお互いに写真を取り合ったりして楽しんでいる。いずれの事業も指導する先生方とボランティアの通訳の協力を得て実施している。

そうした事業を通じて、われわれ日本人ももっと自国の文化に対する理解を深めるべきだとあらためて感じている。



華道教室、この日はサクラの活け込み。右は講師の相馬二三子さん



空手の練習日。小寺英吉講師が指導している相馬二三子さん



着物撮影会



茶道教室ではお点前。左は講師の仁平力ヨさん

## 北海道内の国際協力・国際交流団体から 地域の活動

### 留学生ふれあいトーク

### 「異文化多文化コミュニケーションin北海道2006」

9月16日から17日までの2日間、留学生ふれあいトーク「異文化多文化コミュニケーションin北海道2006」(北方圏センター、日本学生支援機構北海道支部共催事業)が開催され、道内大学等で学ぶ外国人留学生33名と日本入大学生4名が日高町と平取町を訪れた。

日高町では国立ひだか青少年自然の家を舞台に、まず初めに地元小学生と一緒に「かるた」や「けんだま」など日本の遊びや、外国の遊びを体験。続いて行われた同町青年会との意見交換会では、「もっと日本の人と交流する機会があったらいい」「公共施設に外国語ができるスタッフを置いてほしい」など留学生から見た北海道に対する要望から「北海道の自然を大切にしたい」「スープカレーを世界に広めたい」など北海道への期待まで、活発な意見が出された。また、夜にはキャンプファイヤーが行われ、青年会からメンバーの太鼓演奏が披露されるなど、一緒に歌と踊りを楽しんだ。

平取町ではアイヌ文化博物館を訪れ、アイヌ民族の人たちからアイヌの歴史やアイヌユーカラ(口承文化)が紹介された。留学生から「民族衣装の模様はどんな意味があるんですか?」「アイヌの女性は唇に入れ墨をするって本当ですか?」などの質問に、講師の方もユーモアを交えてわかりやすく話してくれて、皆興味津々聞き入っていた。

ほかにも、「ムックリ」の演奏や舞踊、アイヌ料理など、たくさんの体験を通してアイヌ文化に触れました。(交流部)



いっしょに外国の遊びを



チセ内でアイヌ文化を継承する地元の女性からアイヌの舞踊を習う留学生たち